

# ピラミッド・テキスト：翻訳と注解（7）

塚 本 明 廣

## The Pyramid Texts: A Japanese translation with commentary (7)

Akihiro TSUKAMOTO

### 要 旨

本稿は、ピラミッド・テキストの第275章から第321章に掛けて、もっぱらその文法・語彙・表記法に視点を据えて、ローマ字転写本文と逐語的対訳とを示した上で、特記すべき事項を語注とした一連の論考の締括りとなるものである。Pyr.474等、個々の問題についての代案をその都度提示した。本稿では、これまで主として参照してきた言語学的研究とはやや異質な、しかし本文の理解にとっては軽視できない、本文配置という視点を駆使した研究の一端に言及する。（本稿を含む一連の論考全体については、結語を参照されたい。）

#### 第275章

マーサー訳<sup>1</sup>は本章も次章以下と一括して「呪文」に含めるが、フォークナー訳<sup>2</sup>は「王が地平へと向かう」との標題をつけて、この章を次章以下とは区別している。

415a	jj.n (.)  xr.Tn bjk.w	汝らの許へ王は来た、鷹達よ。
b	Hw.wt Hrw.Tn hrm r (.)	汝らの館どもが王に閉ざされた故。
c	mcrq.f r pH.f n bsk n jcn	彼の、ヒヒ皮のマアレク衣をその腰に [まとい]。
416a	wn (.)  xns.wj	王は両開きの扉を開き、
	jj.n (.)  r Dr.w ;x.t	王は地の果てに達したり。
b	w;H.n (.)  msd.t.f jm r t;	王はそのメスデト衣をそこなる地面に置きたり。
c	xpr (.)  m wr jmj Sd.t	王はシェデトの町の大きいなる者となる。

Pyr.415cに見られる統語法すなわち名詞 mcrq.f「彼のマアレク衣」とその修飾句（エジプト文法で言う間接属格）n bsk「腸製の」との間に前置詞句 r pH.f「彼の下半身、後に」が挿入される用法は、後述の Pyr.424にも現れる。アレン訳<sup>3</sup>は、Pyr.415を「汝の境内の鷹よ、ヒヒの腸の巻き尾を後に垂らしたウニス王に好意的であれ」と訳し、Pyr.416bの msd.t（フォークナー『簡易辞典』<sup>4</sup>, p.118には「腰肉」とある）については、「(ふつうの)<sup>5</sup>尻尾付き腰布」と訳して、mcrq と対比させている。ネイドウラー訳<sup>6</sup>は、牡牛の尻尾

を持つメスデト衣がその際の着衣であったと断定することは保留しながらも、着衣の変更が王権を巡る儀式に関する事、つまりそれは故王を祭る葬祭ではなく、存命する現王の王権に関わるセド祭の儀式と主張する。彼は、ピラミッド・テキストを専ら葬祭文書としてきた現代のエジプト学を批判し、著書前半において詳細に示した王位更新祭であるセド祭との結び付きを、ここでも強調する。ヒビ皮の衣の意味、そしてワニ神を祭るシェデトの町の意味は、後述の第313章 (Pyr. 502-504) および第317章 (Pyr. 507-510) で再び現れるヒビ神バビとワニ神ソバクとに呼応させて初めて十分に解釈できる。門の象徴でもあり、天上への門番でもあるヒビは、毎朝日の出に際して騒ぎ立つ。それをエジプト人は太陽神ラアの出現を崇める姿と見た、というのが伝統的解釈である<sup>7</sup>。ヒビ皮の衣はそのヒビ神に紛れて門の内に入るために必要なのだと言う。そしてこれは、ネイドウラーの解釈では、再生しかも仮死状態からのシャーマン王(=ファラオ)の覚醒を述べた箇所なのである<sup>8</sup>。ソバク神については、後述の第317章を参照のこと。

### 第276章—第299章

これら一連の本文を、フォークナーは「蛇その他の危険な生き物を斥ける呪文」として纏めている<sup>9</sup>。アレンは、前室東側全体すなわち破風部分と壁面部分とを「霊の再生のための呪文」と纏めた上で、さらに「地平の東端に入る」ための呪文と「敵対的存在に立向かうための呪文」とに細分していて、ここはその後半に当たる。前後に王の昇天を仄めかす呪文が連続する中において、かなり異質の内容を持つ呪文という印象だが、解説抜きの翻訳には必ずしもそのことが明白に示されていない。短い注釈にも明確な言及はない。この点については、オーシンク (J. Osing) やアレン (J. P. Allen) の立場に拠ったネイドウラーが、説得的な議論を展開している<sup>10</sup>。彼らによると、前後一貫性を欠く呪文の羅列に見えるピラミッド・テキストが実は玄室・通路・前室・通路等から成る地下構造と密接な関連を持って配置されている。すなわち、玄室は冥界 (dw:t) を、前室は地平 (:x.t) を象徴していて、女神ヌート (nw.t) の胎内を象徴する石棺から甦った王の魂は、冥界たる玄室を巡った後、地平たる前室に達し、日の出の太陽すなわちホルスとなって通路を抜け、ピラミッドの外すなわち天へ昇る、という神話を反映するというのである。したがって、翻訳もその状況を反映したものとなる筈である。上述のアレンの標題は、その具体例である。ただし、葬儀およびその式次第を反映したものではないという点では三者共通していても、ピラミッド・テキストが全体として葬祭に関わる文書ではないとする点で、ネイドウラーは先行する二人の研究者(彼の言う「主流エジプト学」)<sup>11</sup>から訣別する。彼はそこからさらに展開して、例えば前室壁面蛇払いの呪文は、前室から玄室に抜ける通路を隔てて対面する壁、すなわち玄室西側破風部分の同じく蛇払いの呪文と相互に呼応するよう意図的に配置されたものとする<sup>12</sup>。下に明示したとおり、内容の対応関係は章番号の前後関係を乱し、対応本文毎にみてもその内容が完全に一致するわけではない。とは言え、鍵となる共通の語または語句により、呼応関係が見られることは彼の主張するとおりである。その照応関係が、彼によれば、いわば結界 (field of protective energy) を成しているというのである。まるで赤外線センサー侵入監視装置を思わせる印象的な図が示されている<sup>13</sup>。呪文のパリアを張り巡らせるという点では、むしろ耳無し芳一の世界を彷彿させる。洋の東西、古今を問わず、結界の観念が古代エジプト人にも無縁でなかったことは、碑文によく知られた王名を囲む、すなわち王を守護するカルトゥーシュの例にも明らかである。さらに、玄室西破風の蛇払いの呪文の数18と前室東側の蛇払いの呪文の数24とを足した42という7の倍数が、エジプト人にとっては特別な意味を秘めた数字であったことにもネイドウラーは注意を喚起する。これについては、ピラミッド・テキストから発展した新王国時代の葬祭文書である「死者の書」において42柱の神々が陪審員を務める、死者の無罪告白の場面をその恰好の例として挙げる事ができる<sup>14</sup>。

玄室西破風	共通の鍵語（句）	前室東壁
PT226：Pyr. 225-226	ペリカンの君	PT293：Pyr. 434-435
PT228：Pyr. 228	xr Hr r Hr, ナイフ	PT290：Pyr. 431
PT229：Pyr. 229	爪を立てる	PT283：Pyr. 424
PT230：Pyr. 230-234	ncj, ncw, m;fd.t	PT297：Pyr. 440-441
PT235：Pyr. 239	扉	PT280：Pyr. 421
PT238：Pyr. 242	ヘケヌ油, Hcy-t;w	PT282：Pyr. 423
PT240：Pyr. 244-245	ムカデ, ホルス	PT299：Pyr. 444

## 第276章

417a j r j . k j r . k j r j . t j r . k	汝自らに汝はなせ、汝自らになす [べき] ことを。
b z k z k j m j q r q . t . f j m j r d	その洞窟の中の、足枷たるゼクゼクよ。

アレンは、jrjを「害をなす」の意にとる。負のニュアンスを含むjrjの同様の用法は、後述のPyr. 421にもある。フォークナーが訳出しなかったzkzkについて、アレンは'digger'「穴掘り」と訳している。『簡易辞典』には該当語がなく、関連がありそうな語としては、zksk、sksk、'destroy'を見るのみである (p. 252)。

## 第277章

418a x r H r w n j r . t . f	ホルスは彼の目のために倒れよ、
z b n k ; n X r . w j . f	牡牛は彼の辜丸のために這いずり廻れ。
b j x r z b n	倒れよ、這いずり廻れ。

k; 「牡牛」の異文としてstX「セト神」がある。既出Pyr. 142のホルスとセトの対比と、しかも両者が争って互いに傷つけ合った部位とを参照すると、ここは後者が適切に見えるが、ウナス王のピラミッドがk; 「牡牛」を残し、stX「セト」を示すのはテティ王のピラミッドであることから、本文自体の新旧を問題とすると、k;の方が古いことになる。蛇の動作を表すzbnが、なぜ牡牛やセト神<sup>15</sup>に適用されるのか疑問である。牡牛と訳したk;には、「雄」を意味する場合があるので（本稿脚注58参照）、あるいは「雄蛇」が示唆されているのか。その場合は、ホルスとセトとの争いと無関係となろう。

## 第278章

419a c H c b ; b j	[ヒヒ神] バビは立上がる。
x s f m x n t j x m	[ホルス神] ケンティ・ケムに会わんとして、
b h n t f p s g h n t n m r j . t j m r j . t j	毒唾が護るこの彼、最愛の者が護るかの彼に。
c f x . t j w f j	ウフィ蛇は除かれよ、
j m m k . t j ( . )	王が護られんがため。

アレンは、xmを地名としてxntj xmを「レトポリス<sup>16</sup>の先導者」と訳し、mrj.tjを「躡くのを待たれる者」とし、fxを「解き放たれた」と訳している。tf...tnは「対比」の指示詞である (E185)。

## 第279章

420a	(.)  pj	これなる王よ、
	tj.kj t;H; mr.w	我は堀どもの泥を踏みつける、
	DHwtj H;j (.)	トトこそ王の護り、
b	tj kkj tj kkj	暗き時の、暗き時の。

Pyr. 420a の DHwtj は、サギの姿をした神としてよく知られたトトである。泥中の闇に潜み害毒をもたらすものをサギが脚で探り出して捕食する様子を描写していると思われる。後半の拙訳は、H;j を 'champion' と訳すフォークナーに従ったものだが、アレンは「トトよ、王の後！」と訳し、前置詞 H;j を読取る。一人称状態形の tj.kj と tj kkj とが語呂合せをしていることは一目瞭然であるが、フォークナーが 'when it is dark' と訳して tj を代名詞とするのに対し、アレンは tj を動詞命令形と解釈して 'Trample the one of the dark' (例の闇の奴を踏みつけろ) と訳す。フォークナーは「夜間のワニに対する呪文か」という注もつけているので、内容の解釈は大同小異ではあるが、tj を文法的にどう取るかに大きな違いがある。

## 第280章

421a	jrtj jrtj	[邪を] なす者よ、[邪を] なす者よ、
	s;tj s;tj	這う者よ、這う者よ。
b	Hr.k H;k	汝の顔を汝の背に [向けよ]。
	z;w Tw rj wr	汝、大扉に気をつけろ。

ここは、第284章 (Pyr. 425) およびネイドウラー<sup>17)</sup>の指摘どおり、蛇がとぐろを巻いて原初の神アトゥムを身動きできない状態で闇に閉じ込めた神話を指すと思われる。jrtj,s;tj 共に、分詞女性形派生のニスバ形容詞がさらに名詞化したものと解釈する。フォークナーが動詞 'creep' と訳した s;tj はアレン『動詞活用』<sup>18)</sup>には動詞としての言及がなく、アレンは「壁の君」と訳し、rj wj については r; wr と読んで「大口の奴」と訳している。その場合、ウナス(・ピラミッド)本文に現れる表記 <-jj> の解釈が問題となる。{r;}.jj [wr]、つまり「我が大口」とすると、蛇が王を脅した、つまり話し手が交代したことになる。アレン訳では、そうは読めない。

## 第281章

422a	jzz hkw kbb h Hrw.w bj	懲らしめろ、ヘクを、ケベブ・ヘ・ヘルウ・ビよ。
b	rw n ph.tj rw n pT.tj ph.tj pT.tj	ペフティ獅子、ペチュティ獅子、ペフティとペチュティ。
c	jm n jwn Hrw.w Tw bs jf.w jwn hnw	いま我に与えよ、ホルウ・チュベスよ、肉を、今、一壺。
d	ncj ncj ncj ncj	渡れ、渡れ、ナイ蛇よ、ナイ蛇よ。

フォークナーは翻訳不能とする。この訳は、ピアンコフに従う<sup>19)</sup>。ネイドウラーによれば、現代人には意味不明と見えても、語呂あわせ自体に呪力が宿ることを、つまり言語の内在的力を認める古代エジプト人には、十分に意味のある呪文なのである。ヘルメス文書に示されたエジプト人の言語使用のまさに好例だとも言う<sup>20)</sup>。アレンは、後半を「汝の長さものを我に与えよ、肉を積み。'The plaited snake' (編み蛇?) は運び去られるであろう」と訳す。上述の玄室の呼応箇所 Pyr. 233a には、ncj の類似形として new「雄蛇」(他に 225a, 230d など) や nc.t「雌蛇」が現れていた。名詞の ncj が蛇の限定符を持つのに対し、動詞の ncj

は舟の限定符を持っている。語呂合せが関与していることは一目瞭然である。

### 第282章

423a	j x;z:t tn r;j jk.t.k pj	おお、これなるカゼトは我がラー。 これは汝のイケト。
b	x;z:t tn r;j nbw Hknw	これなるカゼトは我がラー、 黄金の首飾り、ヘケヌ油。
c	xcj t;w Hknw k;k nn w;S jr.r.w nn r.f	カアイタウよ、ヘケヌ油よ。 これは汝の牡牛、彼にこれがなされたる強者、

ネイドゥラーによれば、ここは第238章とほぼ同文。正確には後半部分（Pyr. 423b 後半と Pyr. 423c）が同文である。ただし、nbw は表記が特異である。奇妙なことに、対応本文である Pyr. 242では、nbw ではなく、ヘケヌ油の方に同様の特殊な表記（黙字の j）が現れる<sup>21</sup>。ここの「ラー」は太陽神ラアではなく、意味不明の語のカタカナ転写にすぎない。r;j と転写された語は、「口」とは綴りが異なり、語末-j も一人称単数語尾とは断定できない。x;zt 自体が意味不明の語なので、nbw や Hknw と同様に、一時的な特殊表記と断定するのも難しい。仮の訳にすぎない。

### 第283章

424a	jkj.j rj(.)   cn.t tn jr.k j;b:t	誠に王は、汝に対してこの左爪を立てる。
b	dj.f sx.t jm.sn mnw jkfw j jTT m jT	彼はそれらに雄叫びのミン神の一撃を加える。 おお盗人よ、盗むなかれ。

最初の jkj.j が第3語基弱子音の動詞 jkj の一人称単数であることは、綴り〈jkd01jj〉すなわち限定符 D 1（人の横顔）を挿み込む綴りから明らかである。rj は、E838に小辞‘wirklich’として扱われる、Pyr. 248bに既出の語である。同じ行の後半部分 cn.t tn jr.k j;b:t すなわち名詞+指示形容詞+前置詞句+形容詞という統語構造について、SUK は本稿冒頭の415c（上述）および434e（後述）を参照する。jkfw について、SUK およびフォークナーは訳出せずミン神と並べているので、神格の一つと理解していると思われる。アレンは、jm.sn が複数形であるにも拘らず、2行目を「ミン神のためにそれによって（with it）一撃を加えようか、攻撃者よ」と訳す。つまり冒頭の動詞 jkj「攻撃する」の派生分詞男性単数形 jkfw が名詞化したものと解釈しているようである。拙訳は、『簡易辞典』kj,‘cry out’, kj.t,‘shout of acclaim’(p.285)を参照し、ミン神と同格に立つ2語根・第2語基弱子音動詞 kj の派生分詞名詞化形とした。難点は、この型の動詞活用にこれまで分詞形が例証されていないことである。もし、この用例がそれと認められるなら、唯一の例証形となる。一形式の解釈が動詞体系を左右し得る例として、敢えて異論を記して注目しておきたい。因みに、2語根動詞では分詞形が例証され、頭音添加音 j- を持つ形式が通常形式である<sup>22</sup>。

Pyr. 424の解釈に関わるもう一つの要素は、ミン神の性格であろう。これまでのミン神への言及箇所は Pyr. 256a だけである<sup>23</sup>。本節を含む全例証箇所を列挙したところで、以下のとおり、ピラミッド・テキスト全体でも十指に満たない：

0256a	m;:sn Tw mnw js xnt jtr.tj	二つの臣下団を司るミン神の如く
0424b	dj.f sx.t jm.sn mnw jkfw	彼はそれらに雄叫びのミン神の一撃を加える

0953c	sq;.Tn (N)  mr wp w; wt mr.Tn (N)  mr <b>mnw</b>	汝ら, [冥界神] ウェプワウエトの如く我を持上げよ 汝らミン神の如く我を愛せよ
1712b	H; js <b>mnw</b> js	(ホルスが父の魂を) ハーの如く, ミン神の如く (した時)
1928d	<b>mnw</b> js xnt X.t psD.t	九神団の先頭に立つミン神の如く
1948a	h; NN pw Tz Tw <b>mnw</b> js	おお王よ, ミン神の如く身を起せ
1993c	<b>mnw</b> js jmj pr.f Hrw js Dbc.t	館の中のミン神の如く, ジェブアトのホルス神の如く
1998a	cHc.k xntj snw.tj <b>mnw</b> js	汝はミン神の如くセストの社の前に立つ
1761c	jr.f < <b>mnw</b> ?> pr m hrw	彼は日中に出る (=甦る) ミン神の如く振舞う

最後の例は、『ピラミッド・テキスト補遺』<sup>24</sup> (p.15) が不確実としながらもミン神を読みとっている箇所である。神の限定符だけは確実である。

総じて Pyr. 424は、供物を横取りせんと狙う者に掛けての、亡き王の魂を奪い去ろうとする者に対する呪詛と解釈される。蛇が一律に不埒者扱いされるわけではないのであるが、死者の書には、しばしばナイフを手に蛇を寸断する猫の姿が描かれた<sup>25</sup>。ここでは登場するのみで、無名のままのその猫マフデトは、後述 Pyr. 438a, 440c, 442c で再登場し、詳しく描写される。もっとも、これ以前にも一度登場したことがあり (Pyr. 230c)、そこではナアウ蛇と対峙していた<sup>26</sup>。

#### 第284章

425a	pzH.n jtm mH.n.f r; n (.)  b cnn.f cnn.t c Hwj zp; jn Hwtj Hwj Hwtj jn zp; d pf rw m Xnw pn rw e cH; j k; wj m Xnw txn	アトウムが嘔付いた。 彼は王の口を満たした。 彼はとぐろを捲く。 ムカデは上天の権威者に撃たれ、 上天の権威者はムカデに撃たれる。 かの獅子はこれなる獅子身中に [あり]、 我はトキの身中の二頭の牡牛と争う。
------	--	--

ムカデは、他に Pyr. 669a,b と1098c に現れ、「ホルスのムカデ」という合成語として Pyr. 244a, 444a に現れる。トキは Pyr. 420a にも現れたが、そこでは神名の DHwtj であった。この語形 txn は、『大辞典』によると、トトの名としても使われたとある<sup>27</sup>。

#### 第285章

426a	jw nSz.wj.k r Szw.wj.k bS.j jwn Trj b jbX m wj m mw j jTrm bnbT sS; wt c Hw.t Xzj Hw.t D.t twr Htj.t jb.j d jHT.j jbnw.w sw rw m mw ;w; Htj.t jb.j tj	汝の [左右] 二つの毒液は汝の二つの袋にある。 吐出せ, 今, それらを, 水気に溢れるものを。 おお, 目配せする者よ, 鉢巻の者よ, セシャウトよ。 雨よ, 腐らせよ, 雨よ, 毒蛇を。 我が喉を洗い流せ。 我 jbnw(?) にして jHT(?), 獅子は水で脅かされ, 我が喉は喜ぶことよ。
------	--	---

## 第286章

427a	cbS.w m ;w S.w Tm TjT hnw(.w)	長い池どもの如きワイン壺ども 汝らは壺（ども）のチチュ蛇。
b	kbnj.w zbn.w Hz n.wt	海上を滑るビブロス人達はネット冠どもを讚美する。
c	;wSj ;wSj nTz.j n.wt	長池の住人よ、長池の住人よ、我、ネット冠どもを持上げ、
d	j;.T m.j	汝、我が名を称える。

フォークナーは、理解不能として全体を翻訳することを避け、讚美され（Hz）奉げ持たれる（nTz）ネット冠（n.t, 427b, c では複数形をとり nw.t）に言及するものと示唆するに留まっている。アレンは、横滑りに進む蛇の姿を海上を滑るように走るビブロス船に喩えたものと解釈している。拙訳は、アレンの訳文<sup>28</sup>に基づいて上のローマ字転写を割出した上で、さらに新たな解釈を加えたものである。Pyr. 427a の ;w 「長い」は一般的な綴りではない。同一字母の3度の繰返しによる男性名詞複数形語尾-w の表記は珍しくないが、語幹に含まれる w の表音的表示はそれ程頻度が高くはない。次に、『大辞典』にも記載がなく、限定符も伴わない TjT を「蛇」とするのは、アレンに従ったものである。hnw 「壺」が単数であるか複数であるかは断定し難い。テティ・ピラミッドの本文に複数形表示の限定符を添えた異文があることは事実だが、蛇が単数形であることから判断すると、語幹末に含まれる-w を表記した可能性がある。さらに別の解釈として、合成語 TjT hnw 全体に掛かる複数形表示のための限定符つまり TjT.w hnw 「壺の蛇ども」を意味した可能性もある。427b の kbnj 「ビブロスびと」とその複数形 kbnj.w とは『簡易辞典』に該当語がなく、男性名詞 kbn 「ビブロス」（地名）や女性名詞 kbn.t 「船」から(p.285) 推読したに過ぎないものである。とは言え、地名 nxn 「ネケン」（=ヒエラコンポリス）や p 「ペ」（=プト）から派生したニスバ形として nxnj の複数形 nxnj.w や pj の複数形 pj.w に <j> の表記を欠く形式が共にピラミッド・テキストに例証されるので<sup>29</sup>、kbn 派生のニスバ複数形として、kbnj.w という形式はかなり蓋然性が高いものである。zbn 「這う、這いずり廻る」は、前後の呪文にやや高い頻度で例証される動詞である（Pyr. 418, 430b, 441a, b, 443c）。427c の ;w Sj は、直前の427a に例証される ;w S 「長い池」のニスバ派生形と解釈したものである。jjj は『簡易辞典』に 'adore' (p.7) とある。

## 第287章

428a	nnj mw.t.f nnj mw.t.f b jkrr m nn jkrr m nn m; Tfj Tfj m; Tfj	その母が nnj(?) なる者よ、その母が nnj(?) なる者よ。 汝、誠にここに在りや、汝、誠にここに在りや。 失せろ、獅子よ、失せろ。
------	---	--

ここも全体的に意味不明である。総じて、ピラミッド・テキストに現れる呪文の難解さは、文脈を形成できぬ程に短い上に、稀な語が使用され、しかも限定符が省略されて表音表記が勝る点に起因することが多い。ここを含め、先の呪文 Pyr. 426 や次の呪文 Pyr. 428 以下そのような例は枚挙に暇ないほどである。因みにアレンは、「その母が彼を追い出した汝よ、その母が彼を追い出した汝よ、汝はそのような者ではないのか、汝はそのような者ではないのか、獅子よ、吐出せ」と訳している<sup>30</sup>。

## 第288章

429a	hkj hkr.t.jzj r.k b Hr Hr w;.t	ヘキ蛇よ、ヘケレト蛇よ、進め、 顔を道に向けて。
------	-----------------------------------	-----------------------------

j.r.t (.)  m dgjw n.f	王の目よ、彼を見つめるなかれ。
c jm.k jrj wp.t.k m (.)	汝の遣いを王に向けて差し向けるな、
Tfj mjw	失せろ、下がれ。

へキ、へケレト共に限定符として蛇を伴うことに拠る訳である。429c の mjw については、ゼーテが<sup>31</sup> Pyr. 687 b での同語の使用を参照しながら、動詞命令形派生の感嘆詞の一つとして 'hinweg, von hinnen' と訳し<sup>31</sup>, フォークナーが 'out of it' と訳すのを参照した<sup>32</sup>。

### 第289章

430a xr k; n sDH xr sDH n k;	牡牛はセジュフに倒れ、セジュフは牡牛に倒る。
b jxr zbn	倒れろ。這いずり廻れ。

### 第290章

431a xr Hr Hr Hr prj	顔が別の顔に倒れ込む。
nm s;b km (j)r.s	黒きナイフはそれに逆らう。
cm.n.f n.f	それ [ナイフ] はそのために呑み込んだり。
b xr Hr Hr Hr prj	顔が別の顔に倒れ込む。
nm km jr.s	黒きナイフはそれに逆らう。
jTj.n.f n.f	それ [ナイフ] はそのために取りたり。

### 第291章

432a dr Hknw.k b;; HD	汝の名誉は除かれた、白きバーアよ、
jn pr m fnT	フェネチュ蛇から出て来る者により。
b nHm Hknw.k n.k b;; HD	汝の名誉は (汝には) 奪われた。白きバーアよ。
jn pr m fnT	フェネチュ蛇から出て来る者により。

### 第292章

433a ntktk.k ntkj jkj nhj	汝は ntkj を ntktk する(?), イキネヒ(?)よ。
b tkn.t.k ntk n.k jkj nhj	汝の tkn.t(?)は汝にとって ntk(?)だ, イキネヒ(?)よ。

再びフォークナーが理解不能とした呪文を、アレンは、「汝は襲撃者が襲撃した者だ、汝、襲撃を仕損じた蛇よ、汝の攻撃は汝の攻撃者に対するものだ、汝、襲撃を仕損じた蛇よ」と訳している<sup>33</sup>。

### 第293章

434a H; kw jmn jmn Tw	下がれ、隠れ蛇よ。失せろ。
b jm.k rDj m; Tw (.)	汝、王 [すなわち我] に汝 [の姿] を見せるなかれ。
c H; kw jmn jmn Tw	下がれ、隠れ蛇よ。失せろ。
d jm.k jw (j)r bw nt (.)  jm	汝、王 [すなわち我] の在る所に現るな。
e jm.j (j)Dd m.k pw (j)r.k	我、汝に向い唱えることなきよう、
nj nmj z; nmj.t	ネミトの息子ネミという汝が名を。

- 435a xr Hm psD.t m Hp  
jfn jfn  
b hjw sDr
- ペリカンの君（=オシリス）はナイルに落ちる。  
逃げろ、逃げろ。  
怪物よ、伏せろ。

## 第294章

- 436a Hrw pj (.)|  
pr m SnD pr m SnD  
b wDD n.f z;w Tw rw  
pr wD n.f z;w Tw rw
- 437a pr.n (.)| m Dnj.t.f  
sDr.n.f m Dnj.t.f  
b jw xc.w (.)| m nhpw  
c pr.n.f m Dnj.t.f  
sDr.n.f m Dnj.t.f  
d jw xc.w (.)| m nhpw
- 我はホルス。  
アカシアから出でし者、アカシアから出でし者。  
彼に命ぜられる、「獅子に気をつけろ。」  
彼に命が下る、「獅子に気をつけろ。」  
王はそのジェニト壺から出た。  
彼はそのジェニト壺に寝た。  
王は、朝に現れた。  
彼はそのジェニト壺から出た。  
彼はそのジェニト壺に寝た。  
王は、朝に現れた。

## 第295章

- 438a sTp m;fd.t (j)r nHb.t jn Dj.f  
b wHm.s jr nHb.t Dsr tp  
c zj pw zp.tjfi (.) | pw zp.tjfi
- マフデトはインディフ蛇の首に飛掛かる。  
彼女は（鎌）首を擡げて首に〔攻撃を〕繰返した。  
生残るは誰、生残るは王。

## 第296章

- 439a TTW Tnj  
N Sm.k cHc n (.)|  
b (.)| pj gb  
hmT sn nj hmT.t  
c mt jt.k Decmjw
- チェチュ蛇よ、いずこ。  
汝は行かず、我に向かって立つ。  
王はゲブ [なる故に]。  
ヘムチェト蛇の兄弟たるヘムチ蛇よ、  
汝の父 Decmjw (?) は死ぬか。

## 第297章

- 440a Dr.t nt (.)| jw.t Hr.k  
b n;Sw.t nn jw.t Hr.k  
c m m;fd.t xnt.t Hw.t cnx  
d jH.s Tw jr Hr.k  
p;x.s Tw jr jr.tj.k
- 441a jxr.k m Hs.k  
zbn.k m wzS.t.k  
d jxr sDr zbn  
m; Tw mw.t.k nw.t
- 王の手は汝の許に来た。  
復讐者は、汝の許に来たれるこの者、  
マフデトとして [来たれる者]、生命の館を司どる者。  
それは汝の顔を撃ち、  
それは汝の両目を塗り取る。  
汝が汝の汚物に塗れ、  
(汝が) 汝の尿中を這いずるように [なれ]。  
倒れ込め、伏せろ、這いずり廻れ、  
汝の母ヌートが汝を見る [故]。

## 第298章

- 442a xc rc ;x.t.f tp.f ラアが現れる、その頭に聖蛇（ウラエウス）を頂きて、  
 b jr Hf;w pn pr m t; Xrj Dbc.w (.)| 地から出たる、王の指の下なるこの蛇に向かい。  
 c jSc.f tp.k 彼は汝の頭を切落とす、  
 m ds pn jmj Dr.t m;fd.t Hr [生命の館に<sup>34</sup>] 棲まうマフデトの手中のこの刀で。  
 443a sT;f tpj.w r;k 彼は汝の口中のものどもを引き摺り出す、  
 sSr.f mt.wt.k 彼は汝の毒袋を搾り出す、  
 b m fdw jpw rwd.w jmj.w xt Tbw.tj オシリスのサンダルを飾るこれら4本の紐で。  
 c hjw sDr k; zbn 怪物よ、伏せよ、牡牛よ、這いずり廻れ。

## 第299章

- 444a D.t r p.t zp; Hrw r t; 毒蛇は天に。ホルスのムカデは地に。  
 b Tbw.tj Hrw ホルスのサンダル、  
 S;s.f nb Hw.t k; TpH.t 彼が館の主を踏みつける時、洞窟の牡牛よ。  
 c SnT N SnT.j シェンチ蛇よ、我は妨げられず。  
 d nh.t (.)| nh.t.f 王のイチジクが彼のイチジク。  
 xtj.t (.)| xtj.t.f 王の隠れ家が彼の隠れ家。  
 e gm.j (.)| m w;t.f 王たる我がその途上に見つけし者は、  
 wnm.f n.f sw mwmw 彼、自らのため、そやつを餌食とする。

以上で、一連の蛇払いの呪文が終る。

## 第300章

- 445a j Xrtj n nz;t おお、ネザトのケルティよ、  
 mXntj nj jqh.t jr.t Xnm クヌム神が造りしイクヘト舟の渡し守よ、  
 b jn nw n (W)| それを王 [の許] に齎せ。  
 (W)| pj zkr nj r; sT;w 王こそはラスチャーウ（＝ロスタウ）のソカル神なり。  
 c jw (W)| jr bw Xr zkr xntj pDw S 王はペジュシュを司るソカル神が棲む場所へ向かう。  
 d sn.n jpw これなるは我らが兄弟、  
 jn nw n m;Dw jpn n.w z.t これら砂漠のマジュにこれを齎した者。

渡し舟あるいは渡し守への言及は、この前室東壁の PT300の他、前室南壁の PT270<sup>35</sup>および、ネイドゥラーによると「その真向い」(directly opposite it) に位置する北壁の PT310 (後述) に現れる。実は、他にも、PT270から間に4章挿んだ右側つまり真向いとは言えない PT262<sup>36</sup>にも渡し舟への言及箇所があるのだが、ネイドゥラーは触れない。さらに、渡し舟 mXn.t あるいは渡し守 mXntj の類語をも含めるなら、PT300の真正面から右手よりの PT263から PT267に掛けても夜の聖船と昼の聖船<sup>37</sup>、天の葦舟<sup>38</sup>、ラアの聖船<sup>39</sup>が現れる。したがって、敢えてネイドゥラーの説を敷衍して、上述の蛇払いの呪文 (第277-299章) に見られた意図的な配置、あるいは隠された意図をここにも読取るのであるなら、東破風の PT300及び北壁の PT310が南壁の PT262から PT270に掛けての一連の呪文と相互に照射し合って、この場合は防禦網ではなく、渡河すなわち王の昇天のための救いの網を張り巡らしていることになる。ロスタウと呼ばれる空間は、

ネイドゥラーによると、この世とあの世との関門あるいは再生の関門となる迷路であり、渡し守の比喩と相俟ってまさしく三途の川を渡るイメージだが、ガンジス川に比すべきナイル川の存在とそれを取巻く生活空間を思うと、類似表現が生まれるのは極めて自然なことであろう。ソカルは、ネイドゥラーの図にあるごとく<sup>40</sup>、ラアまたはホルスの顔を持つミイラにされた太陽神の一姿態である。

### 第301章

446a	p;.t.k n.k njw Hnc nn.t	汝の供えのパンは汝にあり、ニウとネネトよ。
b	mXnm.tj nTr.w Xnm.tj nTr.w m Sw.sn	その覆いで神々を守る、神々の守護神達よ。
c	p;.t.k n.k jmn Hnc jmn.t	汝の供えのパンは汝にあり。アムンとアムネトよ。
d	mXnm.tj nTr.w Xnm.tj nTr.w m Sw.sn	その覆いで神々を守る、神々の守護神達よ。

nn.t, 'lower heaven'「下天」（『簡易辞典』, p.134）の綴りには、ガーディナー「字書」コードに該当字母が見当たらずためそのままではローマ字翻字ができない文字が含まれている。上下転倒した変異形を例えば英字小文字付きで表記して、〈M22-M22-O49-N01a〉とする他ない。『ギリシャ・ローマ時代字書』<sup>41</sup>に例えば〈M541-O1735-N5〉または〈M541-O1737-N5〉と表記できる。ただしここで問題となるのは、その読み方である。「字書」のO49（G.p.498、交差路を持つ円形の街の俯瞰図）には、Njw.tとNn.tとの二つの読み方が混同して用いられたとして、ここの他に以下の2箇所が言及されている：

Pyr. 149	dbH.k pr.k r p.t prr.k	汝は [上] 天へ昇ることを求め、昇る
	dbH.k h; k jr nn.t h; ; k	汝は下天へ降ることを求めて、降る
Pyr. 1691	Sw m gs.k j;b	[男神] シュウは汝の東側に
	tfnw.t m gs.k jmn	[女神] テフヌトは汝の西側に
	nnw m gs.k rsw	ネヌは汝の南側に
	nn.t m gs.k mH.t	ネネトは汝の北側に

まずPyr. 1691の用例から検討すると、夫婦とされる男女一対の神々が前半に現れるので、四方位との対応から、後半に出現した神々もまた男女一対の彼らと同等の神格であることが推測される。形式上も男性形とそれに-t語尾を付加した対応する女性形である。次に、ここのPyr. 446後半に現れるjmnとjmn.tも、男神アメンと女神アムネト（またはアメント）という男女一対の神々への言及であることは疑いようがない。形式的にも後者は女性語尾-tを前者に付加しただけである。したがって、Pyr. 446後半に現れた二柱の神々も、これらの例と同様に、女性名詞語尾-tを持つ女神が、男神と対比されていることが推測される。そしてそれを根拠に、男神njwと対をなす女神をnn.tではなくnjw.tと読む可能性が考えられる。その根拠としては、O49がnjw.t「街」を表記する文字であることなのだが、これが表語文字であり、表音文字[njw]としての用例が、他に見られないことが難点である。Pyr. 149の場合は、「上の天」と「下の天」とが対比的に現れるが、p.t「天」が女性形の普通名詞であるため形式上の対比が見られない。さらに、女神としての「天」を表わす場合は、男神ゲブと夫婦関係にあるnw.t「女神ヌート」が使用される。

447a	p;.t.k n.k jtm Hnc rwtj	汝の供えのパンは汝にあり。アトゥムとルウティよ。
	jr.wj nTrj.sn Dt.sn Ds.sn	その二神自らを、自ら造りし方々よ。
b	Sw pw Hnc tfnw.t	シュウとテフヌトよ、

	j.r.tj nTr.w	神々を造り,
	wtT.tj nTr.w	神々を生み,
	smn.tj nTr.w	神々を据えたふた方よ.
448a	jDd Tn n jt.Tn	汝らの父に伝え給え,
	b wn.t rDj.n n.Tn (W)  p;wt.Tn	王は汝らの供えのパンを汝らに供え,
	sHtp.n Tn (W)  m Twt.Tn	王が汝らの奉納物で汝らを宥めたことを.
	c jm.Tn xsb (W)	汝ら王を妨げるなかれ,
	D;f xr.f jr ;x.t	王が彼 [の父] を地平へ渡す時.
449a	jw (W)  rx sw rx rn.f	王は彼を知り, その名を知る. [すなわち]
	nH rn.f nH nb rnp.t rn.f	その名は「永遠」, その名は「永遠, 年の主」.
	b mcH; c	腕の [立つ] 闘士,
	Hrw Hr sHdw p.t scnx rc rc nb	天体に君臨するホルス, 日毎ラアを生かす方よ.
450a	jqd.f (W)  scnx.f (W)  rc nb	彼は日毎王を象り, 王を生かす.
	b jj.n (W)  xr.k Hrw St;	王は汝の許に來たり, シェタのホルスよ.
	jj.n (W)  xr.k Hrw Szmtj	王は汝の許に來たり, シェゼムティのホルスよ.
	c jj.n (W)  xr.k Hrw j;btj	王は汝の許に來たり, 東のホルスよ.
451a	m.k jnj n.k (W)	見よ, 王は汝に運び來る,
	j.r.t.k wr.t j;b;t m rwxt.t	癒せし大いなる左目を.
	b Szp n.k sj m c (W)  wD;t	汝, 王から無傷で受取れ.
	mw.s jm.s wD;t	その涙が中にあるままに, 無傷で.
	c Tr.s jm.s wD;t	その血が中にあるままに, 無傷で.
	H.wt jm.s wD;t	その管が中にあるままに, 無傷で.
452a	j;q jr.s	その方へ上れ (j;q),
	jT n.k sj m rn.k pw n ;qs nTr	汝, それを取れ, 神の飾り (;qs) の名に掛け.
	b jc.k n.s m rn.k pw n rc	その方へ登れ (jc), ラア (rc) の名に掛け.
453a	dj n.k sj r H;t.k	汝, それを眉 (H;t) に塗れ,
	m rn.s pw n H;t	眉墨 (H;t;t) というその名に掛け.
	b Trwrw.k jm.s	汝, それにて楽しむべし (Trwrw),
	m rn.s pw n Tr.t	柳 (Tr.t) というその名に掛け.
454a	THn.k jm.s m m nTr.w	汝, それにて神々の間で輝かん (THn),
	m rn.s pw n THn.t	輝き (THn.t) というその名に掛け.
	b Hkn.k jm.s m rn.s pw n Hknw	汝, それにて喜ばん (Hkn), ヘケヌ油 (Hknw) の名に掛け.
	c rnnwt.t mr.s Tw	レネヌテトこそが汝を愛するゆえ.
455a	cHc zxnj wr m wp w;wt	立て, 偉大な浮き使いよ, 冥界の遣いとして,
	b m nH.tj m ;x.k pr.tj m ;x.t	汝の力に満たされ, 地平から上りつつ.
	c jT n.k wrt.t	汝, ウエレト冠を取れ,
	m ;cc.w wr.w c;w xntj.w THnw	リビアに君臨する大いにして偉大なるアアア共から.
456a	sbk nb b;Xw	バークの主, ソブク神よ.
	b ncj.k r sx.t.k	汝は汝の原を渡る.
	xnz.k Xnw ksb.t.k	汝は汝のケスベトの森の中を横切る.

c	ssn fnD.k jd.wt Szm.t	汝の鼻は汝のシェズメトの香を嗅ぐ。
d	sjc.k k; n (W)  n.f r gs.f	汝は王のカーを彼のため彼の傍らに上げる、
e	mj jc n.k xnz tw.k tw	これなる汝の鬢が汝のために掲げられる如く。
457a	wcb r.k (W)  sb;q r.k (W)	汝、王を清めよ。汝、王を磨け。
b	m S.k pw z;bj z;b scb.jw.k nTr.w jm.f	汝の山犬の池において、 山犬よ、汝、そこで神々を浄めたり。
c	b; n.k spd.n.k Hrw nb w;D zp 4 Hrw.wj w;D.wj	汝、力あり。汝、有能なり。 ホルスよ。緑石の主よ。 4回。二羽の緑のホルスよ。

## 第302章

458a	sbS p.t cnx spd (.t) n (.)  js cnx z; spd.t	天は晴れ、ソティスは生きる、 王が生ける者、ソティスの息子たる故。
b	wcb.n n.f psD.tj	二組の九柱神は彼のために浄めたり、
c	m msxtjw jxm sk	不滅の北斗七星として。
d	N sk pr (.) (pn) r p.t N Htm ns.t (.)  r t;	王の館は天で滅びず、 王の玉座は地で費えず。
459a	dx r.sn rmT p;j r.sn nTr.w	人々は身を隠し、神々は身を逃れる故。
b	sp; n spd.t (.) (j)r p.t m cb sn.w.f nTr.w	ソティスは王を天に昇らせた、 その兄弟神の伴として
c	kf.n nw.t wr.t rmn.wj.s n (.)	大いなるヌートは、その両肩を王に晒した。
460a	qfn.n.sn sn b;wj xntj.w b;w jwnw Xr tp rc	オンの霊達を先導する二つの霊は、 ラアに頭を下げた、
b	sDr jrj.sn nn n rmj.wt nTr	神の通夜で夜を過ごした者達は、
c	ns.t (.)  xr.k rc N rDj.f sj n kj nb	王の玉座は汝の許に、ラアよ。 彼は如何なる者にもそれを渡さぬ。
461a	prj r.f (.) (j) r p.t xr.k rc	王は天へ汝の許へ出る、ラアよ。
b	Hr n (.)  m bj.k.w	王の顔は [まるで] 鷹だ。
c	DnH.w (.) (pn) m ;pd.w	王の翼は [まるで] 鴨だ。
d	cn.t.f m wx;w Dw f.t	彼の鍵爪は [まるで] 角蛇丘の杭だ。
462a	N mdw n (.)  r t; xr rmT	地にては人々に王に対する訴えなく、
b	N xbn.t.f r p.t xr nTr.w	天にては神々に彼への非難なし。
c	dr.n (.)  mdw.f sk.n (.) (j)r.f jc(r) rf (.)  n p.t	王は彼の訴えを拭った。 王は彼のため潰した。 王は必ず天に昇らん。
463a	sp; n wp w;w (.t)  r p.t m m sn.w.f nTr.w	ウェブワウエトが王を天に、 兄弟神の中に昇らせた。
b	jT.n (.)  c.wj(f) m smn	王はその両腕を雁のように羽ばたいた。
c	Hwj.n (.)  DnH.w m Drj.t	王は翼どもを鷹のように打った。
d	p; p; rmT	飛立つ者は飛立つ、人々よ。

p; (.)| r,j m c.Tn

王は汝らの許から飛立つ。

## 第303章

464a nTr.w jmntj.w nTr.w j;btj.w  
nTr.w rsw.w nTr.w mHtj.w西の神々よ、東の神々よ、  
南の神々よ、北の神々よ、  
これら四艘の清浄なる葦舟を、  
汝らはオシリスのため整えたり、  
彼が天へ向かう時。b fdw jpw zxn.w wcb.w  
dj.w.n.Tn n wsjr  
c m pr.t.f jr p.t

465a D;f jr qbHw z;f Hrw jr Dbc.wj.

彼は息子ホルスを連れ天空へ航行せん。

b snx.f sw Dj.f xc.f m nTr c; m qb  
c wd sn n (.)|彼を天空の偉大な神として顕現させんと、子を護らん。  
王のためにそれらを備えよ。

466a Twt Hrw z; wsjr

汝はオシリスの息子ホルスカ。

Twt (.)| nTr smsw z; Hw.t Hrw

汝は、王よ、長子たる神か、ハトホルの息子か。

b Twt mt.wt gb

汝はゲブの裔か。

467a jw wD.n wsjr xc (.)| m snw Hrw

オシリスは王がホルスたる者として顕現するを命じたり。

b jw zX.n fdw jpw ;x.w jmj.w jwnw  
c jr c n nTr.wj c;wj m qbHwこれらオンなる四霊は記したり、  
天空なる二柱の偉大なる神の記録に。

## 第304章

468a jnD Hr.T z;t jnpw Hr.t ptr.w p.t

御機嫌麗し、天の窓に寄るアヌビスの娘よ、

b Hnk.t DHwtj Hr.t mc;c.w mj;q.t  
c jwn w;t (.)| sw; (.)|

梯子の天辺のトトの伴侶よ、

469a jnD Hr.k njw Hr sp.t mr nx;

御機嫌麗し、蛇行水路の土手のダチヨウよ。

b jwn w;t n (.)| sw; (.)|

王に道を開けよ、王が通れるよう。

470a jnD Hr.k ng; rc Xr fdw cb.w

御機嫌麗し、四つ角持つラアの牡牛よ。

b cb.k m jmn.t cb.k m j;b.t  
cb.k m rsw.t cb.k m mH.tその角の一つは西に、その角の一つは東に、  
その角の一つは南に、その角の一つは北に。

c qcH cb.k pw jmn.t n (.)| sw; (.)|

汝の西の角を王のため曲げよ、王が通るよう。

471a Twt jmntj wcb

汝は清浄なる西方者(=死者)か。

prj.j m bjk.t

我は鷹 [の町] から来た。

b jnD Hr.T sx.t Htpj

御機嫌麗し、供物の原よ。

c jnD Hr sm jmj.w.T

御機嫌麗し、そこなる薬草よ、

jnD Hr sm (.)| jmj.w.T

御機嫌麗し、そこなる王の薬草よ。

d c;b wcb jmj.j

我が内なる清浄は快きかな。

## 第305章

472a T;z m;q.t jn rc xft wsjr

梯子は、ラアによりオシリスの前で結ばれた。

b T;z m;q.t jn Hrw xft jt.f wsjr

梯子は、ホルスにより父オシリスの前で結ばれた。

c m Sm.f n ;x.f

彼がその霊に向かって進む時、

d wc.sn m pn gs wc.sn m pn gs

一つはあちら、一つはこちら、

	jw (.)  jmjw.t.sn	王はその間にあり。
473a	jn Twt js nTr wcb s.wt pr.j m wcb.t	汝は確かにその座が清浄なる神か、 我は清浄なる所から来た者。
	b cHc (.)  j.n Hrw Hms (.)  j.n stX	立て、王よ。とホルス曰く。 座せ、王よ。とセト曰く。
	c Szp c.f.j.n rc	彼の手を取れ、とラア曰く。
474a	;x (j)r p.t X.;t jr t;	霊は天に向い、屍は地に向う。
	b Szp.t rmT qrs.sn	人が葬られるとき受取る物は、
	c x.;s m t x.;s m Hnq.t Hr wdHw n xntj jmntj.w	千 [個] のパンと千 [壺] のビール、 西方者の司の祭壇上なる (もの)。
475a	Sw; jwcw N wn.t xr.f zX	彼についての記録なき子孫は憐れ。
	b zX (.)  m Dbc wr	王は親指で記録すべし。
	c N zX.f js m Dbc Srr	彼は決して小指で記録せざるべし。

この章、特に Pyr.474は明らかに葬儀の場を彷彿とさせる内容であり、ピラミッド・テキストと葬儀との関連性を窺がわせるに十分なものである。しかし葬儀との関連付けを極力否定するネイドゥラーにとって、ここで展開された梯子という象徴は世界中のシャーマニズム文献に現れるものと同じものなのである。それは、ネイドゥラーによれば、創世記28章12節のヤコブの夢の梯子を初めとして、世界中のシャーマニズムに見られる、霊界に達するためのシャーマンの道具としての神秘的梯子なのである。故にここは、ピラミッド・テキストをシャーマンとしての王が仮死体験を経て再生・復活する儀式を描写したものである、彼の主張を一層補強するものなのである。ネイドゥラーは、Pyr.474冒頭の「魂(アハ)は天に属し、肉体(カト)は地に属す」という表現は、人間の魂の起源と本質とが天上にあり、故にそこでこそ人間はその真価を発揮するというピラミッド・テキストの宇宙観を要約したものだと言う<sup>42</sup>。ネイドゥラーが引用したピアンコフは、確かに、前置詞 jr/r を 'belongs to' と訳している<sup>43</sup>。しかし、エジプト語で「～に所属する」の意を表す一般的な単語は n であり、r は一般的に方向性を表す。その点を考慮すると、拙訳の方が本来の意味に近いのではないと思われる。つまり、「魂または霊が肉体を離れて天界を目指す」がその意味するところと思われる。それはまた、生身の肉体のまま昇天は適わぬという思想の表明であり、むしろネイドゥラーの想定するシャーマニズムの思考を排除する。王の死が現実の出来事であれ、仮想上のことであれ、本文には確かな判断の手掛りはないと思われる。つまり、ピラミッド・テキストを葬祭文書とする説とシャーマニズム文書とする説との、何れかの妥当性を判定する直接的材料とはならない。ただし、ピラミッド・テキストがその後中王国時代の棺柩文や新王国時代の死者の書に引継がれて行った歴史と、それらの文書が地下墳墓の墓室に埋葬されたミイラの副葬品として出土する紛れもない葬祭文書であることとを思い合わせると、ピラミッド・テキストが葬祭文書であった可能性は相当に高いと言うべきであろう。確かに、もともと生者のために説かれた教えが、時代を経る内にもっぱら葬儀の場に追いやられてしまうことを思えば、エジプト宗教に、生者の領域から死者の領域への追放とも言うべき変容があってもおかしくはない。しかし、もしピラミッド・テキストが葬祭とは全く無縁の文書であるとしたら、古王国時代のエジプト人は墓碑銘以上の葬祭文書は残さなかったことを意味する。少なくとも、現在までに高官の墓碑銘以外に深く葬祭に関わる文献は発見されていない。すると、古王国時代の王のための墓碑銘や葬祭文書は、王の遺骸と共に、今も地下深く隠されているとでも言うのであろうか。ピラミッド・テキストが崩御した王を死者としてではなく生者として遇しているとしても、何の問題もない。たとえ生物と

しての存在を停止しても、当人が生きているかのように語り掛けることは、我々現代人も普通に容認し、従っている一般的な慣習ではないか。古今東西、死者は語り掛け、そして、うた（歌・謡・訴）う。

### 第306章

- 476a nfr.wj ; m;w Htp.wj ; ptr  
j.n.sn j.n nTr.w  
何と見るに美しきこと、何と見つめるに安らぐことよ、  
と彼ら曰く、神々曰く、
- b pr.t rf nTr pn jr p.t  
pr.t rf (.)| r p.t  
これなる神が天へ昇るのは、  
王が天へ昇るのは、
- 477a b;w.f tp.f  
Sc.t.f r gs.wj.fj  
その力を頭上に、  
その畏怖を辺りに、
- b Hk;w.f tp rd.wj.fj  
その魔力を足下に（漂わせ）。
- c jr.n n.f gb mj qd jr.j n.f jm  
ゲブは、彼になさるべきことのままに彼になしたり。
- 478a jj n.f nTr.w b;w p  
nTr.w b;w nXnw  
ネケン（の地）の霊たる神々と、  
nTr.w jrj.w p.t  
天に住まう神々と、  
nTr.w jrj.w t;  
地に住まう神々とが彼の許に来て、
- b jrj.sn n.k wTz.w Hr c.wj.sn  
両腕で彼を支え上げんとす。
- 479a pr.k rk r p.t  
j;q.k Hr.s m rn.s pw n m;q.t  
汝が天に昇るよう、  
梯子というその名に掛けて汝がそれを登るように。
- b rDj n.f p.t  
rDj n.f t; j.n jtm  
天は汝に与えられたり、  
地は汝に与えられたり、とアトゥム曰く。
- 480a mdw Hr.s pw gb  
j;wt j; t.j j;wt Hrw j;wt stX  
それについて語るは、ゲブ。  
c sx.wt j;rw dw;sn Tw  
我が領地の丘はホルスの丘とセトの丘。  
d m rn.k pw n dw;w spd js  
Xrj ksb.wt.f  
葦原は、彼らは汝を拝する。  
ソベド崇拜者という汝の名に掛けて、  
彼のケスベト樹の下なる。
- 481a jn sm; n.f Tw  
Dd.n jb.f mt.k n.f  
彼が汝を殺したか、  
汝は彼のために死すべしと、彼の心臓が言ったか。
- b m.k rk Tw xpr.tj rk r.f  
m jmnw n sm;  
みよ、汝は誠の彼に対する  
野牛の踏ん張り牛となった。
- c jmn jmn jmnw  
踏ん張れ、踏ん張れ、踏ん張り牛よ、  
d wn.k mn.tj xntj.sn xntj ;x.w Dt  
汝が彼らの先頭で、霊達の先頭で永遠に踏んばるよう。

### 第307章

- 482a jwnw m (.)| nTr  
jwnw.k m (.)| nTr  
オン（の地）なる者が王の内に、神よ。  
汝のオンなる者が王の内に、神よ。
- b jwnw m (.)| rc  
jwnw.k m (.)| rc  
オンなる者が王の内に、ラアよ。  
汝のオンなる者が王の内に、ラアよ。
- c mw.t nt (.)| jwnw.t  
jt n (.)| jwnw  
王の母はオンなる者。  
王の父はオンなる者。

- 483a (.)| Ds.f jwnwj msj m jwnw 王みずからオンなる者、オンの生まれ。  
 b sk rc Hrj tp psD.tj ラアが二つの九柱神の支配者で、  
 Hrj tp rx.wt nfr tm 民草の支配者がネフェルテムでありし時。  
 c jwtj snw.f jwcw jt.f gb その父ゲブの裔たる彼に等しき者なき時。
- 484a nTr nb wd.tj.f c.f その手を差出すであろうあらゆる神が、  
 b mDrj Hr n (.)| rk dw;.f Tw 汝を拝むために王の顔が汝に向く時、  
 c njs.f r.k Hr Dt.f nTr Hr fnD.f nTr 彼の身に汝を召す時、神よ、我が鼻に掛け、神よ、  
 d N t.f N p;q.f 彼のパンはなく、彼の供えのパンはなし、  
 m cb sn.w.f nTr.w 彼の兄弟神の中にあつて。
- 485a N h;b.f h;b.t N sTp.f jb.t 彼は遣いを遣わさず、彼は藪を飛越えない。  
 m cb sn.w.f (nTr.w) 彼の兄弟神の中にあつて。  
 b N wn/wnn n.f c;.wj mskt.t 夜の御座舟の両扉は彼に開かれず、  
 N wn/wnn n.f c;.wj mcnd.t 昼の御座舟の両扉は彼に開かれまい。  
 c N wDcc mdw.f (m) jmj njw.t.f 彼は市民として裁かれず、  
 N wn n.f c;.wj Htmw.t 供給者の両扉は彼に開かるまい。
- 486a jj.n (P)| pn jr.k これなる王は汝の許に来たれり。  
 b (.)| pj sm;tj k;c; Hr pr m jwnw これなる王は野牛、オンの平原の大いなる牡牛。  
 c jj.n (P)| pn jr.k sm;tj これなる王は汝の許に野牛として来たれり。  
 d (.)| pj DrT ms Tw mss Tw これなる王は常に汝を生み、また汝を生むであろう。

## 第308章

- 487a jnD Hr.k Hrw m j;.wt Hrwj.wt 御機嫌麗し、ホルスの丘々のホルスよ。  
 b jnD Hr.k stX m j;.wt stXj.wt 御機嫌麗し、セトの丘々のセトよ。  
 c jnD Hr.k j;rw m sx.wt j;rw 御機嫌麗し、葦原の葦よ。
- 488a jnD Hr.Tnj twt.tj jb 御機嫌麗し、和解せし二人よ。  
 z;.tj fdw nTr.w xntj.w Hw.t c;.t 大いなる館を司る四神の二人の御娘よ。  
 b pr.tj xrw n (.)| H;tj 王への〔呼掛けの〕声に裸で出た御二人よ。
- 489a m;.n n.Tn (.)| mr m;; Hrw n ;s.t 王は汝らを見た、ホルスがイシスを見る如く。  
 b m;.n n.Tn (.)| mr m;; nHbw k;.w n srq.t 王は汝らを見た、ネケブカーウがサソリを見る如く。  
 c m;.n n.Tn (.)| mr m;; sbk n nr.t 王は汝らを見た、ソブクがネイトを見る如く。  
 d m;.n n.Tn (.)| mr m;; stX n tt.tj 王は汝らを見た、セトが二人の和解者を見る如く。

## 第309章

- 490a (.)| pw DH;j nTr.w H;j Hw.t rc 王は、ラアの宮居の奥の神々のジェハイ。  
 b ms n nH.t nTr.w jmj.t H;t wj; rc ラアの聖船の奥に居ます神々への祈りに生まれし者。  
 c Hms (.)| m b;H.f 王は彼の前に座す。
- 491a jwn (.)| hn.w.f 王は彼の箱（共）を開く。  
 jsD (.)| wD.w.f 王は彼の布告（共）〔の風〕を切る。  
 b xtm (.)| mD;.wt.f 王は彼の便り（共）に封をする。  
 c h;b (.)| wpwtj.w.f jtm.w wrD 王は疲れを知らぬ彼の遣い（共）を遣わす。

d j r j (.) | j D d . t . f n (.) | ( p n ) 王は王が述べしことを行なう。

## 第310章

- 492a S n j . w (.) | S n j . w j t m 王が呪われれば、アトゥムが呪われる。  
 b S n T T (.) | S n T T j t m 王が罵られれば、アトゥムが罵られる。  
 c H w j . w (.) | H w j . w j t m 王が撃たれれば、アトゥムが撃たれる。  
 d x s b b (.) | m w ; t x s b b j t m 王が道で遮られれば、アトゥムが遮られる。  
 493a (.) | p w H r w 王はホルスなり。  
 j j . n (.) | m x t j t . f 王はその父に従いて来たれり。  
 j j . n (.) | m x t w s j r 王はオシリスに従いて来たれり。  
 b H r . f m x n t . f H r . f m m H ; f 前に顔ありて後に顔ある者よ。  
 494a j n n w n (.) | これを王に遣わせ。  
 j n . t . j n . k z j m X n . t 如何なる渡し舟を汝に遣わさん。  
 b j n n (.) | j p ; s x n n . s 「飛び翔ける」(舟)を王に遣わせ。

## 第311章

- 495a m ; ; r c ( W ) | 見よ、ラアよ、王を。  
 s j ; r c ( W ) | 判れ、ラアよ、王を。  
 b n j s w j r x . w T w 彼は汝が知る者 [だから]、  
 j r x s w 汝、彼を知り給え。  
 c j r p r n b ( . f ) もし彼の主君が出て、  
 N x m . f H t p . t D j 彼は与えられた賜物を忘るまい。  
 496a j w n j w . t j w . s c ; w j ; x . t 締出すべきは締出す方も、地平の両扉を開く、  
 n p r . w m e n D . t 昼の御座舟が出る時には。  
 b j r x . k j z H m n w 天蓋の広間を我知れり、  
 H r j b x t j w j z k n p r r . w . k j m . f 汝が出る天頂の壇の中心の(広間を)、  
 497a h ; k m m s k t . t 汝が夜の御座舟で出掛ける時。  
 b w D (.) | r . k w D s w w D s w D d m d w z p 王に命ぜよ、彼に命ぜよ、彼に命ぜよ、4回、  
 n f d w j p w k h ; w / [ c ] H ; w . k 汝の周りのこれら四方の風に、  
 m ; ; w m H r . w j m d w . w m w t w t 二つの顔で見、唸り声を上げる(風共に)、  
 498a m r H n c q s n . t j s n H n c s k . s n 哀れなる者ら、それらが滅ぼす者らと共に。  
 b j m . s n D ; c . s n 彼らが手を返さぬように、  
 m D r j ( W ) | j r . k j w ( W ) | x r . k 王が汝に戻る時、王が汝に向かう時に。  
 499a D d . j n . k r n . k p w n 我は汝に汝のこの名を言おう、即ち、  
 ; g b j w r p r m w r t 「大いなる方から出づる大いなる氾濫」と。  
 b N S p ( W ) | d j . k s w m k k w 王は盲いず、汝が彼を闇に置こうとも、  
 c N j d . f t m . f s D m x r w . k 彼は黙せず、彼に汝の声が聞こえずとも。  
 500a j T j . k n . k ( W ) | H n c . k H n c . k 汝、我を汝に伴い給え、汝と共に、汝と共に。  
 b n f c n . k S ; p . t 汝のため嵐を追返す者、  
 x s r n . k j g p 汝のため黒雲を追払う者、

jsD n.k Snj.t	汝のため雹を打破る者 [である我] を。
c jrj n.k (W)  hnn hnn	王は汝のため賞賛に賞賛をなし [=重ね]、
jrj.f n.k j; j;	彼は汝のため讚美に讚美をなす [=重ね]、
d wdj.k n.k (W)  tp Dt;t	汝、汝のため王をハゲワシ神の頭に置かんことを。

## 第312章

501a p; t p;; t	パンが飛ぶ、パンが飛んでいる、
r Hw.wt.j Hw.wt nt	我が館、すなわちネト冠の館（共）に向かって。

## 第313章

この章から本稿第321章に至る章は、ピラミッド外部と地下構造とを繋ぐ通廊（corridor）の両壁に刻まれた呪文である。ピラミッド・テキストはどのような順序で読むべきか、つまり、地下構造への入口から奥の方へと読み進むように配置されているのか、それとも奥の部屋から入口に向かって読み進むのが正しい読み順なのか、という長い論争があることは、拙訳(1)において紹介した。ネイドゥラーは、ピラミッド・テキスト本文研究小史の中で要点を押えた紹介をしている<sup>44</sup>。その難問に対する画期的な提案は、既にアレンによってなされていた。それによると、リシュト出土の中王国時代の写しに見られる本文の流れに従えば、ウナス・ピラミッドの本文は通廊の南側つまり西壁前室付近から始まって通廊を北側つまり入口に進んだ後、対面の東壁に移って再び南側つまり前室付近から北側つまり入口に向けて読み進むよう配置されていた、ということである<sup>45</sup>。したがって、通廊壁面の本文の流れは、地下通廊の入口から奥ではなく、地下通廊の奥から出口に向けて読まれた、という結論である。加えて、ネイドゥラーによれば、ウナス・ピラミッドの対峙する両壁の本文がそれぞれ21行からなることも、一連の通廊本文の最初の呪文 PT 313と最後に近い箇所の PT320に共にヒヒ神バビが現れるのも、そして PT313でバビが天界に通じる門の門を外し、PT320で王自らがヒヒ神バビと化して最後の PT321で昇天するのも、PT317と対面の PT319とに共に王の多産性（fecundity）のモチーフが現れるのも、すべて意図的に配置されたもの、という<sup>46</sup>。

502a sT; Hnn b;bj jwn c;.wj p.t	バビの門が抜かれ、天の両扉が開く。
Hrw Hrw	ホルスよ、ホルス。
b jwn.n (W)  c;.wj p.t	王は天の両扉を開きたり、
Hr bxxw Xrj kn.t nTr.w	神々の注ぎしものの下なる炉 [火] の故に。
503a zbn.t Hrw zbn.t Hrw	ホルスの忍ばせ物、ホルスの忍ばせ物、
zbn (W)  jm	王はそこに忍ばせる、
m bxxw pn Xr jkn.t nTr.w	神々の注ぎしものの下なるその炉 [火] の中
b jrj.sn w;.t n (W)	彼らは王のために道を作り、
sw; (W)  jm.s	王はそこを擦り抜ける。
(W)  pj Hrw	王はホルスなる故。

ヒヒ神バビについては、上記、第275章の訳注を参照。バビは、王の化身であるホルスが天に昇る前の最後の関門に立ちはだかる番人なのである。

## 第314章

- 504a H;k ng; ng; 長角牛の頭を切落とせ、  
 Dbc.w ;kr m wp.t.f 地神アケルの指共がその頭に [あり]。  
 b jxr zbn 倒れ込め。這いずり廻れ。

## 第315章

- 505a (W) | pj 王はこれに [あり]。  
 jcn hTt p;TT イアン・ヒヒよ、ヘテト・ヒヒよ、パチエチュ・ヒヒよ。  
 b crt (W) | Hr s;r (W) 王の死は王の願いから。  
 jm;x (W) | Hr tp (W) 王の冥福は王のために。  
 c jrj (W) | hnj hntt 王は歓喜と喜びとをなす。  
 Hms.f m m.Tn Hc;tj.w 彼は汝らの内に座す、子らよ。

505a の jcn, hTt, p;TT について、ゼーテ訳<sup>47</sup>、フォークナー訳<sup>48</sup>、ピアンコフ訳<sup>49</sup>のいずれも三匹のヒヒの名前とするのに対し、アレン訳<sup>50</sup>は hTt, p;TT を名詞 jcn に掛かる分詞形として訳している。したがってヒヒは1匹となり、505c で呼掛けられる者達は正体不明、少なくとも明示されていないことになる。動詞の hTt, p;TT との関連はゼーテが既に指摘していたが、彼は名詞として訳している。ピアンコフによると、これらのヒヒの名はいずれも「アムドゥアト（冥界）の書」に現れるというが<sup>51</sup>、そこに列挙された9匹のヒヒの名前の中に hTt と p;TT は読取れても jcn は読取れない<sup>52</sup>。普通名詞としての jcn は「ヒヒ」の意で Pyr. 415c, 516c, 1462ab に例証されるが、他の2語はピラミッド・テキストに例証がない。ただし、『簡易辞典』には htw < hTw, 'ape' が記載され (p. 160)、『大辞典』には jcnj, hTt, p;TT 共に 'Pavian' との記載がある (I,S. 41 ; II,S. 504, 「特に日の出や日没を崇める猿を指す」と注記 ; I,S. 500)。これらの神話上のヒヒの名は掛詞としても使用されていると思われる。なぜなら、これらのヒヒと同根または派生関係にあると思われる語 jcnw, 'greeting(?)', woe', htt, 'adoration' があり (『簡易辞典』, pp. 11, 160)、特に後者は語義的にはヒヒの類語でないにも拘らず、限定符としてヒヒを伴うからである。上記『大辞典』の注記も参照のこと。この辺りの語義と表記との融通無碍の関係については、エジプト文字が得意とする表現法としてこれまでも何回か指摘してきた。

次に Pyr. 505b について、ネイドゥラーは、この呪文が葬祭と関連しない確たる証拠とする。それは、「死は王自身の望み」という語句が、自ら意図的な仮死状態に陥るギリシャやヘレニズム時代の神秘主義に通じるから、というのである<sup>53</sup>。その際ネイドゥラーは、ゼーテ訳とそれを踏襲したフォークナー訳とを参照したと思われる。両者共に crt を「死」と訳すからである。ゼーテがそのように解釈した根拠は、「シヌヘ物語」の、cr nTr r ;x.t.f 「神はその地平に隠れた」という王の崩御を述べた一節にある。つまり「御隠れ=死」と言う訳である。これに対しピアンコフ訳は、Pyr. 1349a の「紅い耳と赤い尻を持つバビ神」を描写した一節<sup>54</sup>に言及して、crt<sup>55</sup>をヒヒの特徴である赤い「尻」と訳しているので、かなり異なる印象を与える。すなわち彼は、ウナスが自らの意志でヒヒに変身したことを述べた箇所と解釈しているのである。そこには王の死を彷彿させる直接的語句はなく、仮死体験という解釈も引出せそうにない。先行する諸訳を常に参照するネイドゥラーであれば、ここで言及が欲しいところであるが、ない。アレン訳もまた死のイメージを読み込まず、「肛門」と訳している。さらに、ピアンコフが先行訳と違うところは、s;r 「願い」と読まず s; と読む点である。「ガーディナー字書」によると、文字 T12 には [;r] と [;j] の二つの表音的用法があるので、s;r または sj と読むこと自体は誤りとは言えないのだが、ピアンコフはゼーテの単

なる誤読としている。ピアンコフ自身のファクシミリ版図1にも、ウェブ上の写真にも、この文字 T12 は鮮明に読取れるので、ピアンコフの主張が理解できない。T12 を s; 「背」の限定符と読んだと推測する他ないが、『大辞典』にも『簡易辞典』にもそのような表記はない<sup>56</sup>。しかしまた、アレン訳も同様に s; と読取っていることは、「背」と訳すところから明らかである。s;r にはそのような意味はないからである<sup>57</sup>。文意が理解し易いという意味で、本節全体をヒヒの描写とすることには賛成なのだが、s;r を否定する根拠が不明なため、ゼーテ以来の解釈を支持せざるを得ない。

ところで、「冥福」と訳した jm;x は、墓碑銘の定型句として故人の名前の前につける、いわば「居士・大姉」に当る尊称であり、一般に「祝福された」と訳される語である。しかし、「祝福された（状態の）王は王のために」と訳したところで、意味がそれほど明瞭になる訳ではない。アレンの訳は、jm;x を表音文字ではなく表語文字の用法として、jm;x 「背骨」と読んだためと思われる<sup>58</sup>。

### 第316章

506a	j Hmj sHd	おお、ヘミよ、セヘド星よ。
	N rDj.n n.Tn (W)  Hk;f	王はその魔力を決して汝らに与えず。
b	Hms (W)  s;f jr Dsr.t m jwnw	王はオンの聖女に並びて座す。
c	Sdw (W)  r p.t	王を天へ伴え。

### 第317章

507a	jj.n (W)  mjn m xnt mH.t ;gbj	王はきょう洪水の氾濫の中から現れた。
b	(W)  pj sbk w;D Sw.t rs Hr Tz H;t	王はソベクなり、 羽毛緑にして、顔 [貌] 鋭く、眉高し。
c	cbS pr m sbq xbz.t wr.t jmj.t j;x	偉大なる方の膝と尻尾とを持ち、 日差しの中に出て来た暴れ者。
508a	jj.n (W)  r mr.f jmj.w jdb ;gb m mH.t wr.t	王はその水路に現れた、 大洪水の氾濫する土手の間の（水路に）。
b	r s.t Htpw w;D.t sx.wt jmj.t ;x.t	安らぎの場へ、 地平なる緑の畑へと。
509a	s;D (W)  sm Hr jdb.wj ;x.t jn.t (W)  THn n jr.t wr.t Hr jbt.sx.t	王は地平の兩岸の草を緑に変える。 王は緑を齎さんとする、 畑の只中なる大いなる方の目に。
c	Szp (W)  s.t.f jmj.t ;x.t	王は原の中なるその場所を占める。
510a	xc (W)  m sbk z; nj.t wnm (W)  m r;f wzS (W)  nk (W)  m Hnn.f (W)  pj nb mt.wt jTj Hm.wt m c hj.w.sn	王はネイトの子たるソベクとして出現し、 王はその口で喰らい、 王は放尿し、王はその性器で番う。 王は子種の主である。
d	r s.t mrr (W)  xft Szp jb.f	妻らをその夫らから奪う、 王が望む時、彼の意のままに。

上記第275章（Pyr. 416）では暗示のみに終わっていたソベク神の姿が、ここで詳述される。前半部分は、乾季の数ヶ月を泥中深くに潜んでやり過ごしたワニが、雨季の訪れと共に、驚くべき生命力を発揮して再び

忽然と姿を顕わす様が、王の再生・復活に準えて描写される。呪文が描くその姿は、強靱な生命力という言葉の凌いで遥かに荒々しく、強暴とも言うべきものである。ネイドゥラーによればネイトは戦の女神である。そのことが一層、ソベク神の暴力的なイメージを強化し、Pyr. 510によって決定的なものとされている。一方、雨季の到来と共に顕現するソベク神そしてその化身たる王こそが、緑なす野を齎す存在すなわち復活・再生の主であるという神話を、特に Pyr. 509の言葉が証拠立てている。

ネイドゥラーはPyr. 510について、その内容の荒々しさは既出の第273-274章 (Pyr. 393-414) の「食人讃歌」に次ぐ野蛮さ、とのマーサーの指摘を紹介しつつも、エリアーデの「近代前の社会では、他のあらゆる人生の働き同様、性は聖性を孕んだものであり、生と多産との根源的神秘に関わる一つの方法である」という言葉を引用しつつ、さらにフレイザーにも言及しながら、同時に上の食人讃歌とする解釈をも斥けている。因みに、強暴な動物としてのワニのイメージについては、後代の加筆とされる部分ではあるが、ヨブ記41章にも描写がある。

### 第318章

これには、ウナス (W) に一つ、テティ (T) に二つの異文があり、本文伝承について一考を誘う。

(W)

511a //////////////<sup>59</sup>cm sfx.t.f jcr.wt  
 b xpr.n sfx.t.f nHb.t  
 c wD mdw n sfx.t.f psD.wt  
 sDm.t mdw jt.w

..... 彼の七匹のウラエウス蛇を呑込む  
 彼の七個の脊椎は生じたり。  
 彼の七つの九柱神に命ずる、  
 父祖の命を聴く (ところの九柱神に)。

512a jj.n (.)| jcm.f cntjw  
 b Szp (.)| cntjw  
 cnj.f m cntjw  
 cn.t (.)| m cntjw  
 c nHm.n (.)| wsr.wt.Tn nTr.w  
 d pXr n (.)| nHb.tjfk;w.Tn

王は没薬を呑込まんとて来たり。  
 王は没薬を受取り、  
 彼は没薬に喜び、  
 王の爪は没薬に満ちる。  
 王は汝ら神々の力を奪う、  
 王に仕えよ、彼が汝らに力を与える時。

(T1)

511a (.)| pw ncw Ssm cm sfx.t jcr.w  
 b xpr.n sfx.t.f nHb.wt  
 c wD mdw n sfx.t psD.wt  
 wD mdw n jt.w  
 d mw.t pw nt (.)| Hnjw.t  
 (.)| pw z;.s

王は、七匹のウラエウス蛇を呑込む怒れる蛇。  
 彼の七個の脊椎は生じたり。  
 彼の七張の弓 [=諸民族] に命じ、  
 父祖に命じる方。  
 王の母はペリカン。  
 王は彼女の息子なり。

512a jj.n (.)|  
 b Szp.f cn.t m cntjw cntjw m cn.t  
 c jj.n (.)| nHm.f wsr.wt.Tn nTr.w  
 d pXr (.)| nHb.n.f k;w.Tn

王は来たれり、  
 彼は受取らんとして、没薬満てる爪を、爪に没薬ありて。  
 王は来たれり、王は汝ら神々の力を奪えり。  
 王に仕えよ、彼は汝らに力を与えたり。

(T2)

511a (.)| pw ncw k; psD.t cm sfx.t.f  
 b xpr.sn m sfx.t.f nHb.wt  
 c psD.wt jmjt看 sDm.t jx.t n ntj

王はナアウ蛇、九柱神の牛、七匹の聖蛇 (ウラエウス)  
 それらが彼の七個の脊椎として生ずるように。  
 九柱神は、過去のことを聞きし太古なる方々。

512c	jj.n (.)	王は来たれり、
	jdr.f wsr.Tn	汝らの力を（彼が）潰し、
	d nHb.f k;.w.Tn	汝らの力を（彼が）与えんと。

Pyr. 511は、聖蛇ウラエウスと脊椎と九柱神とがそれぞれ七つ数えられる。ただし（T1）では、同じ psD.t でも「九柱神」と同音異義の psD.t「弓」であることは、訳文に示されたとおりである。表記では、前者が表音文字としての半弦の月、後者が表語文字としての弓を伴うので、その違いは明瞭に書分けることができる。nHb.t「脊椎」の方は、こちらも同音異義語としての nHb.t「蓮の蕾、蓮の蕾形の王笏」があるので、あるいはそれが本来意図された可能性もありそうなのだが、伴う限定符または表語文字は湾曲した背骨の姿である。ゼーテによれば聖蛇「ウラエウス」を指す。さらにゼーテは、後代の中王国時代碑文に残る異文に基づいて（W）の欠文に「王はナアウ蛇、導きの雄（蛇）」を復元する。そしてこの蛇は別名ネケブ・カーウ（nHb-k;.w、文字どおりには「カーの授与者」と称し、Pyr. 512d で語呂合せされた蛇である<sup>60</sup>。ピアンコフによれば、蛇は原初の神々を呑込む力の象徴であり、後代の一連の葬祭文書に基づき、脊椎は太陽神ラアのものであって、その創造力を象徴すると言う<sup>61</sup>。ナアウ蛇は（T2）にも明記されているが、時代的には（W）よりも王朝交代後の（T1、T2）の方が新しい。（T2）は（T1）の直後に配置された呪文であり、Pyr. 512a-b を欠く点から見ても、異文と言っても（T1）を踏まえた表現とすべきではないのか。つまり、（T1）と（T2）と一体で（W）の異文とすべきではないのか。となると、psD.wt は（W）に二重の意味を讀取ったことによる拡張版、とは言えないのか。（T1）の場合、Pyr. 511では同音異義語で意図的に謎めかしたり、父に加えて母や子が登場したり、Pyr. 512では（W）の短文が長文化した表現になっている。一方（T2）の本文は、（T1）と反対に短縮と省略とを被っていると見ることもできる。

### 第319章

513a	(W)  pj k; j;xw Hr jb jr.t.f	王は彼の眼中の輝く牡牛なり。
	b wD; r; (W)  m hh	王の口は火炎で、
	tp (W)  m Hnw.t nb Smcw	王の頭は上エジプトの主の角で健やか。
	c sSm (W)  nTr	王は神を制し、
	sxm (W)  m psD.t	王は九柱神を支配し、
	d srd (W)  xsbD	王はラピスラズリを造り、
	;g (W)  tw n Smcw	王は上エジプトのトゥン草を茂らせる。
514a	jw T;z.n (W)  cq;.w SmSm.t	王はシェムシエト草の索を結びいて、
	b zm;.n (W)  p.wt	王は上下の天を統合したり。
	sxm (W)  m t;.w rsj.w mHtj.w	王は南北の地（を支配す）、
	c nTr jmj.w b;H	および太古の神々 [を支配す]。
	d jw qd.n (W)  njw.t nTr r sD;.s	王は神の都をその理に適って築きたり。
	e (W)  pj xmt.nw m xc.f	王はその即位において三番目なり。

### 第320章

515a	Dsr.n (W)	王は夜を片付けたり。
	grH zb.n (W)  wn.wt	王は時（共）を遣わしたり。

b	xc sxm.w scH.sn (W)  m b;bj	強力な者共が顕れ、王を [ヒヒ神] バビとして立てる。
c	(W)  pj z; pw n jxm.t	王は知られざる方のその息子なり。
d	ms.n.s (W)  n qnj Hr nb Ss;wt	彼女は顔金色なる、夜空の主に王を生みたり。
516a	wr Tn nb.w	控えよ、君主ども、
	jmn Tn rx.wt tp c.wj (W)	身を隠せ、民草よ、王の御前から。
b	(W)  pj b;bj nb Ss;.t	王はバビ、夜空の主なり。
c	k; jcn.w cnx m xm.f	彼を知らぬ者 [ら] を餌とするヒヒ共の牡牛。

### 第321章

517a	H;.f m H;.f	その背がその背にある者よ、
	jn n (W)  sfr.t Htp.t Hr.t psD wsjr	オシリスの背後の供物のセフレトを王に運べ。
b	pr (W)  Hr.s r p.t	王がそれに乗って天へ昇るよう、
	stp (W)  z; r rc m p.t	王がラアを天に護送するよう。

ウナス王ピラミッドでは、これが最後の呪文である。ピラミッドの地下構造への入口に最も近い場所、つまり、様々な障害と妨害を乗り越えて見事復活を果たし、解き放たれて今まさに昇天しようとするウナス王の魂にとっては逆にその出発点、に刻まれた訣別の言葉である。

## 結 語

ピラミッド・テキストは、このあと延々と第759章2291節まで続くのであるが、これまでのペースから推して、全文の訳注を終えるにはさらに数倍の紙幅と期間とを要すると思われる。そこで、ウナス王ピラミッドの本文が完結するこの機会を機に、本誌の貴重な紙面を提供戴いたことに対する感謝の意を表明して、この一連の翻訳と注釈の作業をひとまず終了することとしたい。

本稿を含むこれまでの一連の論考は、纏まった分量を持つ世界最古の宗教文献とされる古代エジプトのピラミッド・テキストの日本語訳を通して、特に文字論の視点を取入れることにより、見直しの只中にあるその文法・語法を再考する試みの経過報告であった。他でもない文字論<sup>92</sup>を切り口としたのは、エジプト語文献の研究において遥かに先行した欧米のエジプト学研究においては、エジプト語では正綴法が確立されなかったというのが大方の説であることに疑問を感じたからである。古代エジプト文字は、全体としては日本語の表記にも似た混在する表記体系を持ち、なかでも漢字の義符(偏)に相当する限定符を駆使する用字法の綾はアルファベット常用者に見落とされていないか、少なくとも、その情報が十分に評価されてはいないのではないかとの思いからであった。事実、一貫性を欠く表記法という印象とは異なり、また表記上の相当の自由さが許容されていたとは言え、エジプト文字にも誤読を避けるための体系としての工夫が随所に見られた。これまでの検討においては、未だ個別的な指摘に留まり、全体の総覧にまで結実していない。古代エジプトの難解な神話世界のイメージの奔流に翻弄されて、呪文番号の流れに沿った通し訳という体裁が、関連箇所への言及を心掛けたにも拘らず、全般的に散漫な印象を与えたことを恐れる。最後になったが、貴重文献の利用に便宜を得た近畿大学、東京大学、佐賀大学の各図書館スタッフに感謝の意を表明したい。

[2007. 11. 16完結]

<sup>1</sup> Samuel A.B.Mercer, *The Pyramid Texts*, sacred-texts.com 2004 (Longmans Green & Co. New York, London,

Toronto, 1952 原本複写インターネット公開版)。url は、<http://www.sacredtexts.com/>。残念ながら、英訳部分のみであり、肝心の注解部分は公開されていない。以下、本文中ではマーサー、脚注では MPT と略記する。

<sup>2</sup> R.O.Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Oxford U.P., 1969。以下、本文中ではフォークナー、脚注では FE と略記する。

<sup>3</sup> James P.Allen (P.D.Manuelian Ed.), *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Atlanta, 2005。以下、本文中ではアレン、脚注では APT と略記する。原文は：Unis-with his bent tail, of the intestine of a baboon, at his rear となっている。ただし、本稿で扱う呪文 (PT275-321=Pyr.415-517) は、APT では (pp.52-61) のウニス (=ウナス) 王 W181-W226 に当たる。呪文番号に関する錯綜した事情については、既に拙訳「ピラミッド・テキスト：翻訳と注解(1)」[本誌第5集第2号, 2001, 93ページ] (以下、拙訳(1)のように略記する) において紹介したところであるが、本書ではピラミッド毎に壁面の順番に呪文番号を振っていく方式を取っているため、さらに混乱の要因が増えた。これは、本文内容はピラミッド毎に完結していたから、との考えによるものである。したがって、以前は同一の本文内容であれば、部屋や壁の位置に拘りなく同じ呪文番号を与えられたものが、同書ではピラミッド毎に異なる番号を持つことになった。例えば旧呪文番号の PT 309 は、同書ではピラミッド毎に異なる番号が振られ、それぞれ W214, T292, P343, M18, N344 となる。新旧番号の対照は同書巻末に収められているものの、参照の便宜という観点からは一長一短の感がある。

<sup>4</sup> R.O.Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962。以下、本文中では『簡易辞典』脚注では FCD と略記する。中エジプト語つまり古典エジプト語という標題にも拘らず古エジプト語あるいは前期エジプト語に属するピラミッド・テキストに関する多数の言及がある。

<sup>5</sup> 「牡牛の尻尾付きの衣」を意味する。

<sup>6</sup> Jeremy Naydler, *Shamanic Wisdom in the Pyramid Texts*, Rochester, 2005。以下、本文中ではネイドウラー、脚注では NPT と略記する。本書は、現代のエジプト学を文学・芸術・歴史・社会情報に偏した外面の分析・研究に留まり、真の理解から程遠い位置にあるとする。古代ギリシャ時代からヨーロッパ中世を通して正当に評価されてきたエジプト文明における神秘主義が、近代エジプト学成立以降次第に軽視されるようになり、今では世俗的・現実主義的古代エジプト人のイメージのみが強調され、少なくとも、現今のエジプト学ではエジプト文明における神秘主義とりわけシャーマニズムは無視されている、ピラミッド・テキストの解釈がその好例である、と批判する。彼によれば、ピラミッド・テキストは葬祭文書でも、葬儀次第でもなく、シャーマンとしてのファラオが演じた、擬死と再生・復活の神秘主義的儀式を反映した文書なのである。同書前半は、宗教学の諸文献を駆使したエジプト文明における神秘主義的要素の指摘である。ピラミッド・テキストに残された儀式は、「セド祭」つまり王の統治能力端的に言えば体力を証明する儀式であった王位更新祭と解釈される。もともと彼は、葬祭文書としての要素を全面的に排除しないだけの慎重さは残している。しかも彼の論難に反し、同書後半部分で展開されるウナス本文の解釈が、言語情報の精密な読取りに心砕いた近代エジプト学者の研究成果に負うことは紛れもなく、本書後半の主張を支える、ピラミッドの内部構造と壁面の本文との配置に関する内的連関を突き止めたのも、葬儀次第と解釈したシュピーゲルや動詞体系を詳細に研究したアレンらの、彼の批判するタイプのエジプト学者であることは、明白である。因みに Pyr.2112 には、H;=n; Tw Hr H;t ... cnx.k jr.k Tz.k Tw 「我、墓前にて汝を悼む・・・汝、甦り給え、汝、立上がり給え」という、葬儀と無縁とは言えない一文が見える。もともと APT (p.295) では、明確に「墓」と訳出しない：'I have mourned you on the site (of your tomb)'. H;t は、一般に「墓」と理解されている単語である (FCD, p.160。同語根の動詞 H;j 「悼む」も参照)。

<sup>7</sup> Maurizio Damiano-Appia, *Dizionario enciclopedico dell'antico Egitto e della civiltà nubiane*, Milano, 1996, p. 68,

babbuini の項。古くはヘル・ウェジ「大いなる白」と呼ばれた神で、ピラミッド時代にはトト神の一姿態とされ、月とも関係があったと言う。

<sup>8</sup> NPT, p. 302。

<sup>9</sup> NPT は、ピラミッド内に蛇が這入り込む可能性は皆無に近いから呪文を文字どおりに取るべきではない、ここの蛇は既に邪悪なものの代名詞化している、と断る (NPT, p. 289)。創世記やギルガメシュ叙事詩を引き合いに出すまでもなく、多言を要しまい。そしてこれは「食人讃歌」の場合も同じであり、それが劇的な比喩表現にすぎないことは、その主張のとおりであろう (NPT, p. 284f.)。最後の晩餐のキリストの言葉を持ち出すまでもない。ただし、ピラミッド・テキストは必ずしも建造時に創作されたとは限らない。つまり、現実には蛇との鉢合わせもあり得た、ピラミッド以前の生活の場を反映した、文字どおりの蛇払いや蛇除けの呪文であった可能性まで否定することはできない。既出の蛇払い呪文に関する拙訳<sup>(5)</sup> [本誌第9巻第2号、83ページ] でふれたことである。ネズミ・ノミをはじめ、日常接する機会の多かった小動物の中で、直截致命的の結果を齎すが故に、蛇が特に恐れられる理由は充分にあった。古代社会は、どれほど文明化されていても、現代の健康的な都市生活とは比較にならない、生命の危険にさらされた環境にあり、魔除けを必要とする場面に事欠かなかつたであろう。ごく最近まで呪術は生活必需品であった。フレイザー『金枝編』(岩波文庫版)にはこれでもかといわんばかりに例示されている。それはともかく、多くの呪文が意味をなさない語句から構成されるのを(意味をなさないから呪文か?)、NPT は(意味とは無関係な)「自立的力としての言語」の例とするが、もはや意味不明になるほどの時間すなわち言語変化を経た証拠とも言える。いずれにしても、確実な証拠はなく説得力に乏しい。

<sup>10</sup> オーシンクとアレンの要約紹介が NPT, pp. 183-185にある。彼自身の説は、NPT, p. 289以下に展開される。

<sup>11</sup> NPT 随所に: 'the standard view of Egypt of academics' (p. 23); 'mainstream academic Egyptology' (p. 28); 'between "mainstream" Egyptology, ... , and "outsiders", ... ignored by the Egyptological establishment' (pp. 30-31)。現代エジプト学を非難するのではない、と牽制しながら、その言葉遣いは穏やかではない。

<sup>12</sup> このような本文内容の呼応関係は、NPT (pp. 235-240f.) によれば、玄室東側破風部分 (PT204-212) と、通路を挟んで背中合せの位置に配置された前室西側破風部分 (PT247-253) との間にも、鏡像関係で成り立つと言う。

<sup>13</sup> NPT, p. 296の図9. 7。鍵語の対応関係は、同書本文に基づき、NPT, p. 295のリストを補ったものである。

<sup>14</sup> 村治笙子・片岸直美・仁田三夫『エジプトの「死者の書」』河出書房新社、2002、86ページ以下。

<sup>15</sup> 「ガーディナー字書」コード E8 では、セト神を「ブタの一種」としている。

<sup>16</sup> Baines, J. & J. Malek, *Atlas of Ancient Egypt*, Oxford, 1980, p. 168によると、下エジプト第2州の首都 xm のギリシャ名。カイロ北西、約13km、現アウシム。既に第4王朝に言及があるが、王朝末期の遺跡しか見つかっていない。

<sup>17</sup> NPT, p. 290、および p. 291の図9. 4。

<sup>18</sup> James P. Allen, *The Inflection of the Verb in the Pyramid Texts*, Malibu, 1984。

<sup>19</sup> Piankoff, Alexandre, *The Pyramid of Unas*, Princeton, 1968, p. 48。以下、本文中ではピアンコフ、脚注では PPT と略記する。

<sup>20</sup> NPT, p. 293および巻末注24。

<sup>21</sup> 拙訳<sup>(5)</sup>、87ページ。そこでは (Pyr. 242c)、ヘケヌ油と読取れないままにヒーケヌーと転写した。全11箇所へのヘケヌ油の例証箇所の内、j を伴う表記が他に見られないためであった。これら二つの章の対応に基づき、ヘケヌ油と訂正したい。逸脱的表記がいずれも j を伴うことに注目したいが、理由は分らない。

<sup>22</sup> APT, pp. 703, 704, 表1, 2.

<sup>23</sup> 拙訳(5)、92ページ [本誌第9集第2号]。そのローマ字転写本文を mjn から mnw に訂正したい。

<sup>24</sup> R.O.Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts, Supplement of Hieroglyphic Texts*, Oxford U.P., 1969.

<sup>25</sup> 注11上掲書 p.59、右上図および下図。注3、上掲書、p.295、図9.6。

<sup>26</sup> 拙論(5)、84ページ [本誌第9集第2号]。

<sup>27</sup> Adolf Erman u. Hermann Grapow, *Wörterbuch der ägyptischen Sprache*, Berlin, 1971, Bd. 5, S. 326。以下、本文中では『大辞典』、脚注では WB と略記する。

<sup>28</sup> APT, p. 53, W192 :

Spray not as a long one of the lakes, you TjT-snake of the jars!

The Byblites have crawled off. The lake-long-one's Red Crowns shall bring in the lake-long-one, for I shall raise the Red Crowns and you shall praise my name.

アレンは、冒頭の語句を cnS.w ではなく、否定辞の w を読取って cnS w と2語に切って訳している。

<sup>29</sup> Pyr. 795d,e および Pyr. 1209b に例証形がある。

<sup>30</sup> APT, p. 53, W193 :

You whose mother turned him away, you whose mother turned him away, aren't you such, aren't you such? Lion, spit out!

<sup>31</sup> SUK2, S. 203。

<sup>32</sup> FE, p. 87。

<sup>33</sup> APT, p. 54, W198 :

You are one whom the attacker attacked, you snake whose attack has missed.

Your aggression is for your aggressor, you snake whose attack has missed.

<sup>34</sup> FE, p. 89, 訳注1に Nt, 710より補足、とあるのに拠った。FPT になく、確認不能。

<sup>35</sup> Pyr. 383b,c: mXntj p.t 「天の渡し守」, mXntj nw.t 「ヌートの渡し守」, mXntj nTr.w 「神々の渡し守」。拙訳(6)p. 103 [本誌第11集第2号]。

<sup>36</sup> PT262=Pyr. 334b, PT270=Pyr. 383b,c。拙訳(6)、92、103ページ。

<sup>37</sup> PT263=Pyr. 336aT: mskt.t, mcnd.t。拙訳(6)、93ページ。

<sup>38</sup> PT263, 264, 265, 266=Pyr. 337a,b,c,d ; 342a,b,c,d ; 351a,b,c ; 358a,c,e,g: zxn.wj p.t。拙訳(6)、93, 94, 96, 97ページ。

<sup>39</sup> PT267=Pyr. 367b, 368a,c: wj;(k) rc。拙訳(6)、99ページ。

<sup>40</sup> NPT, p. 297, 図9, 8。

<sup>41</sup> *Valeurs phonétiques des signes hieroglyphiques d'époque gréco-romaine*, Montpellier, 1990.

<sup>42</sup> NPT, pp. 273-4。

<sup>43</sup> PPT, p. 23。

<sup>44</sup> NPT, pp. 171-184。

<sup>45</sup> マーク・レーナー (内田杉彦訳) 『ピラミッド大百科』東洋書林、2001、33ページに概説がある。

<sup>46</sup> NPT, pp. 299-300, および図9.9。

<sup>47</sup> Kurt Sethe, *Übersetzung und Kommentar zu den altägyptischen Pyramidentexten*, Hamburg, 1935-1962。以下、本文中ではゼーテ、脚注では SUK と略記する。

SUK, 2, S. 349 :

“W. ist es, o icn-Pavian, o hTt-Pavian, o p;TT-Pavian

Der Tod (die Entrückung?) des W. ist auf seinem eigenem Wunsch (geschehen), die Seligkeit des W. ist für ihn selbst (eingetreten).

W. wird den Huldigungsjubel machen, den gleichen Huldigungsjubel (wie ihr), er wird unter euch sitzen, ihr Hc;tj.w”

「ウナスはこれにあり。イアン・ヒヒよ、ヘチェト・ヒヒよ、パチェチュ・ヒヒよ。ウナスの死(消滅?)は彼みずからの意志により(生じ)、ウナスの至福は彼自身のために(生じた)。ウナスは誓の歡呼を、(君達のように)誓の歡呼をなすであろう。彼は君達の間に座るだろう、H;c;tj.w よ。」

<sup>48</sup> FE:

Here am I, O *icn*-baboon, O *hyaene*, O *p;t*-baboon; my death is at my own desire, my honour is upon me, I make acclamation and rejoicing(?), and I will sit among you, O ...”

「私はここにいる。イアン・ヒヒよ、ハイエナよ、パテト・ヒヒよ。私の死は私自身の望みであり、私の誉れは私にある。私は歡呼して、歡喜する。そして私は君達の中に座ろう。おお、・・・」

<sup>49</sup> PPT, p. 17 :

“Unas is an *Ian*-baboon, a *Hetet*-baboon, a *Patet*-baboon.

Unas' bottom is according to his own wish (?),

blessedness is on the head of Unas.

Unas will make jubilation of those (i.e., as those) who jubilate,

he will sit among you, youthful ones.”

「ウナスはイアン・ヒヒ、ヘテト・ヒヒ、パテト・ヒヒである。ウナスの尻は自らの意志であり、祝福はウナスの頭上にあり。ウナスは歡呼する者達の歡呼をなすだろう、ウナスは汝らの内に座るだろう、若者達よ。」

<sup>50</sup> APT, p. 60, 及び p. 64, 訳注85 :

Unis is a screeching, howling baboon, Unis's anus on Unis's back and Unis's back-ridge on Unis's head.

Unis will make ululation and sit among the youngsters.”

「ウニスは吼え唸るヒヒ、ウニスの肛門をウニスの背中に、ウニスの背筋をウニスの頭にして。ウニスは咆哮しワカザルの間に座るだろう。」ヒヒが尻を突き出し肩を怒らせて朝日に向って騒ぎ立てる様子が太陽を拜む様に見立てられていると言う。NPT, p. 302 図9. 11も参照。そこには、上から下に両腕を広げた太陽円盤に向って4匹のヒヒが祈りの型に両腕を挙げて左右に2匹ずつ向かい合っていて、彼らの間には「ラアが昇る時祈る (の図)」との説明文が象形文字で書かれている。「祈る」の限定符もまた通例の両腕を捧げたヒトに代えてヒヒの絵が描かれている。

<sup>51</sup> PPT, p. 17 訳注。

<sup>52</sup> Erik Hornung, *Texte zum Amduat*, Teil I: Kurzfassung und Langfassung, 1. bis 3. Stunde, autograph. von L. Soycher, Geneve, 1987, S. 140f. 参照。

<sup>53</sup> NPT, p. 302。

<sup>54</sup> b;bwj dSr msDr Tms cr.t。

<sup>55</sup> PPT, p. 17の訳注では、;r:t と誤記。

<sup>56</sup> WB, IV, S. 8f; FCD, p. 208。

<sup>57</sup> WB, IV, S. 18f. 他に「欠乏、困窮、苦悩」等の語義を持つ語がある。

<sup>58</sup> 「ガーディナー字書」コード F39。

<sup>59</sup> SUK2, S. 366は、以下のように復元し、FE はそれに拠って訳している :

(W) | pj ncw k; jsSm: [The King is a serpent, the Bull who leads] (この bull は「雄」を意味する)。

<sup>60</sup> SUK, 2, S. 362以下。ウラエウス蛇と脊椎：SS. 368-369、nHb-k;w との語呂合せ：S. 374を参照。

<sup>61</sup> PPT, pp. 18-19。

<sup>62</sup> 『河野六郎著作集第3巻』平凡社、1980。